海洋の視点を再考する

松本亜沙子

目次

一　海難
二　海難記録から見る海の距離感覚

一　海難

中央気象台（現：気象庁）に勤め富士山気象レーダー建設に関わった、山岳小説家である長野県出身の新田次郎の作品のひとつに、「珊瑚」という海を扱った小説がある。新田次郎が、宝石となる珊瑚を海で採集するサンゴ漁船の気象遭難についての記録である九州・五島列島の「富江珊瑚と海難史」という五島新聞の連載資料を見て、これに五島での陸上取材を加え、想像力によって書いた小説である。

題材となった海難は、五島列島から八〇キロ離れた男女群島で、台風によって起こったものである。五島の陸上取材について書いた「珊瑚」巻末の「珊瑚の島取材記」では、海難の詳細が以下のように記述されている。

明治三十八年　行方不明二〇九人、死者一〇人、沈没船数一五五隻

＊The Necessity and Importance of Revisioning History in the Oceanic Perspective.

Asako K. Matsumoto

明治三十九年　行方不明六一五人、死者一一九人、沈没船数一七三隻

（新田次郎「珊瑚の島取材記」一九八三年）

このような大規模の遭難が起こることは、山岳遭難では到底あり得ないことであり、山の情報・文化に詳しい新田次郎が「驚くべき数の犠牲者」という感想を抱くのは当然のことであったと思われる。

しかしながら、このような海難は決してサンゴ漁船だけで起きてきたわけではない。

明治二十八（一八九五）年七月二十四日、鹿児島県枕崎・坊津のカツオ漁船が、枕崎南方三〇キロ付近の黒島沖合いで操業中、黒島と枕崎の西方を通過した台風により遭難した。この時の犠牲者は、枕崎四一一名、坊津一六五名、その他鹿児島県川辺郡全体を含めると七一三名もの漁夫が死亡するという規模であった。この海難は通称「黒島流れ」と呼ばれている（「枕崎警察署の沿革史」二〇〇三年、「鹿児島県水産技術の歩み」二〇〇〇年）。

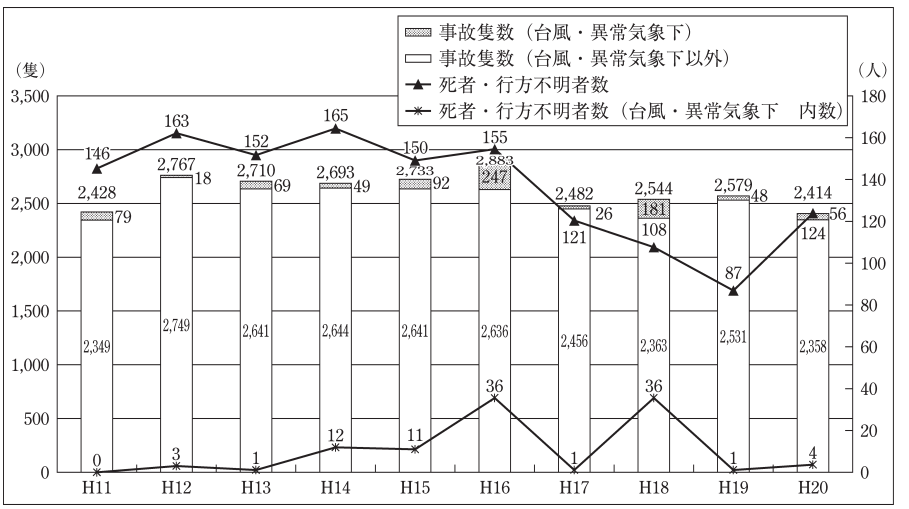
現在でも海難は船の規模、技術の進歩、陸からの距離とは関係なく毎年起こっている。平成二十年度の海上保安庁の統計によると、日本における「海難船舶」の隻数は二、四一四隻、全損・行方不明は一八八隻、船舶海難に伴う死者・行方不明者は一二四人。このうち要救助海難発生数は一、八一七隻、六、四六五人にのぼっている（海上保安庁「平成二十年版　海上保安統計年報」二〇〇九年）。

ここで海上保安庁のいう「海難」の定義は、海上における船舶に、衝突、乗揚、転覆、浸水、その他安全な運航が阻害された事態が生じた場合をいう。また要救助海難とは、海難発生当時救助を必要としたと認められる海難をいう。なお、「海難船舶」とは、「要救助船舶」（救助を必要とする海難に遭遇した船舶）及び「不要救助船舶」（要救助以外の海難船舶）の合計である。

平成十一年度から平成二十年度までの海難事故隻数及び死者・行方不明者数の推移が図1に示されている（海上保安庁「平成二十年海難の現況と対策について」二〇〇九年、第I-1図から引用）。なかでも平成十六年度は、海難船舶隻数二、八八三隻となっており、過去十年で最多である。この年の台風下における海難は二四七隻。海難種類別にみると、浸水が六五隻、転覆が六〇隻、及び安全阻害が三九隻。二四七隻のうち無人係留船の浸水、転覆等が一六六隻を占めている（海上保安庁「平成十六年における海難及び人身事故の発生と救助の状況について（確定値）」二〇〇五年）。

また平成十八年度は、十月四日～九日にかけての低気圧により三陸沿岸や北海道東方沿岸などにおいて一二八隻の海難が発生し

第Ⅰ－１図　事故隻数及び死者・行方不明者数の推移
（海上保安庁「平成20年海難の現況と対策について」2009年、第Ⅰ－１図引用）



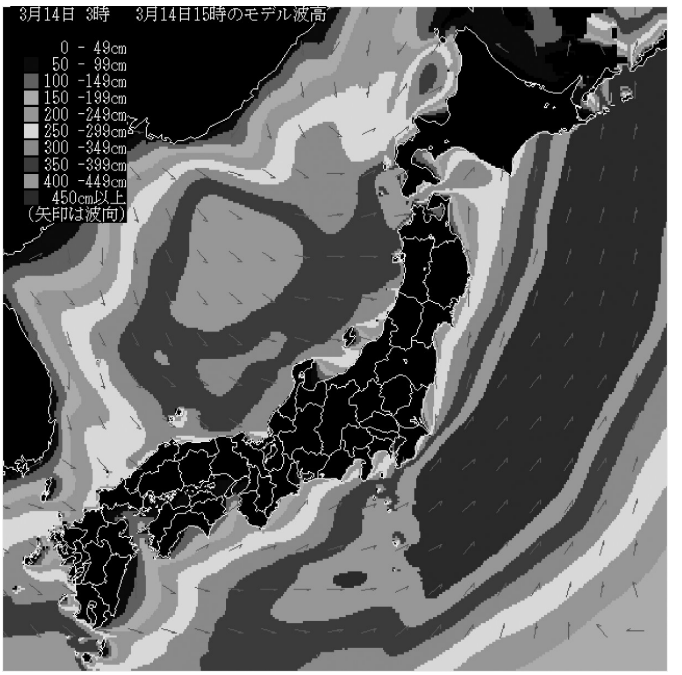
ている。うち漁船が一一三隻を占めた。海難船舶のほとんどは無人係留中の小型漁船等の転覆や浸水の海難であったが、死者・行方不明者が総計三三人であった（海上保安庁「平成十八年における海難及び人身事故の発生と救助の状況について（確定値）」二〇〇七年）。

二　海難記録から見る海の距離感覚

海上保安庁の統計をみると、荒天による被害は大小問わず漁船に多く見られるような気がするが、一般的には漁船は他の商船やタンカー、調査船などの船に比べてその形状から転覆しにくいと言われている。

しかし、海洋研究開発機構に移管された元：東京大学所属の学術研究船・淡青丸（四七九・五四トン）の場合には、波高が四メートルを超えると危険とされており、予報で四メートルを超えそうな場合にはその方面への航海を取りやめる。例えば、二〇〇九年三月十四日〇三：〇〇の沿岸波浪予想（気象庁発表、国際気象海洋（株）提供）は図２（KT09-2航海）の通りであった。その為、一旦高知港を出港したが、土佐湾から出る前の一～二時間のうちに取りやめて帰港し、低気圧通過を一日待機してから再出港している。

図2　2009年3月14日 03：00沿岸波浪予想
（気象庁発表、国際気象海洋（株）提供）



というのも、この時の淡青丸の航海の目的海域は小笠原であり、高知港から小笠原の間には一一〇〇キロの間まったく避難する為の島も港もないからである。これは幕末の天保十二（一八四一）年、ジョン万次郎が漂流したルートと大体似たようなルートで、さらにそれ以上の距離である。海洋上では距離そのものよりも、付近に入る港がないということの方が問題である。非常に遠い距離までの遠征であっても、すぐに入り、風待ちが出来る湊（港）が途中に存在する場合には、大距離とは見なされない。同様に、台風など荒天は通常困難な気象条件ではあるが、あまり恐れられない。恐れられるのは、荒天から逃れられない場合、影に隠れるための島や風待ちのための湊がない場合であり、予測される荒天から逃れられる距離がある場合には、予定の変更は迫られるが恐れられることはない。

二〇〇八年の六月二十三日に起きた、小名浜の巻き網漁船（第五八寿和丸）の沈没事故は、千葉県銚子市の犬吠埼灯台沖の東へおよそ三五〇キロの太平洋上において、カツオ漁の最中のものだった（海上保安庁「平成二十年海難の現況と対策について」二〇〇九年）。なお、この位置の呼称は、いってみれば、〈陸の視点〉により、単純にもっとも近い陸を起点として「犬吠崎灯台沖」としているだけであり、実際に三五〇キロという距離は犬吠崎から陸上

側に向かうと上越を通り越して日本海に突き抜けてしまうほどの距離である。ちなみに、江戸日本橋―京都は直線距離で約三七〇キロ、京都の三条大橋まで旧東海道経由で歩いた場合には、四九五・五キロ（「度量衡法」（明治二十四年三月二十三日公布法律第三号）換算）である。

このように、海の上での位置を〈陸の視点〉で説明する方法では、東シナ海・中国上海沖東四四〇キロと、韓国済州島沖南二〇〇キロと、鹿児島県枕崎沖西三八〇キロが、ほぼ同じ場所を示すこともある。〈陸の視点〉からだと海上での距離感覚、位置の認定をするのが難しいことが理解できるかと思う。

そもそも漁船が沖に出るのは漁場が沖にあるからである。その〈沖〉の定義はつまり、魚がいるところどこまでも、にちかい。実際、カツオ漁の場合、漁場は沿岸の他に、黒潮が蛇行しているさいには紀伊半島沖二〇〇キロの海域（遠州灘沖、熊野灘沖など）であることもある。また、初ガツオ、戻りガツオの名称があるように、カツオは回遊性魚類（回遊魚）の為、日本沿岸（といっても、陸から二〇〇～三〇〇キロであっても沿岸と呼ぶ）を南北片道二五〇〇キロ以上移動し、漁師もその魚と共に南北を移動することで知られている。

鹿児島県枕崎では、動力船以前の江戸時代初期から明治時代後半まで、七反帆と呼ばれる帆船ですら一〇〇海里（一八五・二キロ）内をカツオ漁場としていたとされる。また、明治時代にも沖縄慶良間、対馬、釜山近海まで漁に出ていたという記録がある（「鹿児島県水産技術のあゆみ」二〇〇〇年）。

もちろん、海に出るのは漁民だけではない。江戸時代の交易のための廻船は、大坂―江戸間を船で移動していた。表1は日本で明治時代までに起こった海難の記録の大まかな事例である。海難事例ごとに、a、船籍（出身地）、b、出港地、c、仕事海域（＝海難海域）、そして漂流した場合には、d、漂流先が示してある。能動的移動距離として船籍（出身地）から出港地までの能動的移動距離a―bと、出港地から仕事海域（＝海難海域）までの能動的移動距離b―cが示されているが、出港地が不明な場合にはa―cの距離とみなした。また廻船関係で出航地が江戸となっている場合は浦賀を基準として距離を計算した。

海難といわれる場合には、c―dの受動的移動・漂流距離と漂流時間が注目されるが、漂流のスタート地点である海難地点がそもそも出港した陸から数一〇〇キロ離れていることがある（表1 b―c）。更に、元々の船籍（または出身地）を見ると、湊を継いで非常な距離を移動していることがわかる（表1 a―b）。比較すべきは、港からの距離と（b―c）、船籍（または出身地）

からの距離（a－b）である。これは〈陸の視点〉からでは想像のつかない距離感覚である。

小説「珊瑚」巻末の「珊瑚の島取材記」には、〈陸の視点〉いや〈山の視点〉の人である新田次郎がその想像力によって書いた記述がある。つまり、そこには〈海の視点〉による海上の距離感覚がないのだ。

例えば新田次郎は、男女群島の海難にあった人が鹿児島県川辺郡坊津町出身者にも三十数名いたことを聞き、

「明治三十九年の海難はずいぶん遠くにまでその犠牲者は居たのである。（四六九頁）」

と感想を述べ、また

「カンコロ、キリボシ（大根のキリボシ）などを小さな船に積み込み、別れの水盃をして、遠く男女群島へサンゴ採りに出かけて行った漁師とその家族たちのことを思った。（四七一頁）」

という想像を述べている。

新田次郎の「珊瑚の島取材記」に出てくる事象は、表1では、a、船籍（長崎県五島列島富江、大分県、鹿児島県川辺郡坊津町など）、b、五島列島・福江港、c、男女群島となる。

長崎県・五島列島の福江から男女群島までの距離は約八〇キロである。現在のエンジン付きの漁船の速力は二〇人乗りのものでも一三～一五ノット位（一ノット＝時速一・八五二キロ）で航行可能であるが、男女群島までは一四ノットの航行で約三時間で到着する距離である。また三〇ノット出る船であれば、一時間半程度で到達してしまう。昔の櫓・帆の漁船の速力は二～三ノット程度といわれている（注：これより速い船ももちろんあった）が、それでも約一四時間、つまり半日ぐらいで到着することが可能な距離なのである。

また、鹿児島県坊津の船は、「遭難当時、（坊津の）秋目の村では、毎夜毎夜、浜で篝火を焚いて、サンゴ船に乗って出て行った人たちを待っていた」（新田次郎「珊瑚の島取材記」一九八三年）という記述から、坊津の村では、福江経由ではなく男女群島から直接坊津に帰ってくる可能性があることを認識していたことがうかがえる。坊津から男女群島への距離は約一九〇キロ程であり、新田次郎の想像した別れの水盃の八〇キロの二倍程の距離である。台風は日本の場合通常南方からやってくるので、男女群島への台風が通過する際の暴風圏内に当然ながら鹿児島県の坊津も含まれていたと考えられ、男女群島への船団が台風に遭遇したことは坊津においても事前に容易に把握出来ただろう（図2の低気圧時の波浪範囲参照）。

以上のことを踏まえると、小説「珊瑚」は、新田次郎の〈陸の視点〉で書かれていることが明らかになると同時に、これまで〈海の視点〉が一般的に提示されたことがあまりなく、いわば欠落してきた象徴になっているかもしれない。

これまで上げてきた事実によって分かるとおり、海では陸から遠い距離であるから危険なのではない。和歌山県の潮岬沖、千葉県の野島崎沖など、陸からの距離が近くであろうとも危険な場合には現代の船舶でも十分危険なのである。「板子一枚下は地獄」という生命観はこのような事実に基づいている。

〈海の視点〉は、本稿で書いたとおり、距離感覚も位置の確定も、〈陸の視点〉とは大きく異なっており、この点から日本における海運・歴史・文化を再考する必要があると考えられる。

注

＊本稿は、二〇〇九年七月二日、麗澤大学比較文明文化研究センターセミナー「海洋からみた文明」の一部を元に構成された。

関係者各位に感謝致します。

引用文献

[1] 新田次郎「珊瑚の島取材記」一九八三年
[2] 海上保安庁「平成十六年における海難及び人身事故の発生と救助の状況について（確定値）」二〇〇五年
[3] 海上保安庁「平成十八年における海難及び人身事故の発生と救助の状況について（確定値）」二〇〇七年
[4] 海上保安庁「平成二十年海難の現況と対策について」二〇〇九年
[5] 海上保安庁「平成二十年版　海上保安統計年報」二〇〇九年
[6] 鹿児島県水産技術者ＯＢなぎさ会編「鹿児島県水産技術のあゆみ」鹿児島県、二〇〇〇年
[7] 西部海難防止協会　鹿児島支部「黒島流れ」「枕崎警察署の沿革史」第一二三号、二〇〇三年
[8] 地域の暮らしを記録する会「新居書留帳第四集　遠州新居無人島漂流者の話　織田作之助「漂流」（復刻）と解説（山口幸洋）」日本財団、二〇〇四年
[9] 山下恒夫再編『石井研堂コレクション江戸漂流記総集』第一巻　日本評論社、一九九二年
[10] 浦川和男「実録　小笠原母島漂着記（1）」「海と安全」六月号（No. 485）、一九九九年
[11] 「亜墨漂客談（外題：紀州天寿丸亜墨漂客談）上、下」（東京海洋大学所蔵）
[12] 「安南国漂流人帰国語」（牡鹿郡大瓜村棚橋　佐藤　天保四年写本）
[13] 「異國漂着船話 巻之一」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[14] 「異國漂着船話 巻之二－［三］」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[15] 「異國漂着船話 巻之四－［五］」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）

[16]「異國漂着船話 巻之七」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[17]「異國漂着船話 巻之八-［九］」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[18]「異國漂着船話 巻之一〇」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[19]「異国漂流物語」
[20]「異国漂流人帰国之記」（東京海洋大学所蔵）
[21]「宇婆良加波那／竹節洞主人著」天保六（一八三五）年
[22]「雲州人漂流記：全」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[23]「永寿丸魯国漂流記」（漂流奇談全集／石井研堂編校訂、一九〇八年（国立国会図書館所蔵）
[24]「奥山日記引用記事」『八丈実記・第二巻』近藤富蔵編著（東京都立中央図書館蔵）
[25]「尾薩漂民私記草稿／佐藤公業、藤隆則著」一八一七年（写）
[26]「乙巳漂客記聞：完／宇田川興齋著」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[27]「尾張者異國漂流物語」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[28]「海外異聞　五巻（存三巻）／靄湖漁叟撰并書」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[29]「海表異聞」巻六十二～六十六の「船長日記」弘化四（一八四七）年
[30]「嘉永五年難船人帰朝記事：全漂巽記略　四巻／川田維鶴撰」（東京海洋大学所蔵）
[31]「嘉永船便加羅物がたり」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[32]「春日丸伝兵衛漂流記」西田耕三著
[33]「紀州太郎兵衛自筆漂流記　乾」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[34]「紀州天壽丸露國漂流記」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）、
[35]「環海異聞」大槻玄沢編、一八〇七年
[36]「寛文十年無人島漂流記」『小笠原島紀事・巻之二十七』（国立公文書館内閣文庫蔵）
[37]「寛文十年ニ紀州藤代村ノ廻船難風ニアヒ遠嶋エ吹流サレテ皈帆ノ時ノ覚書ノ次第」『玉適隠見・巻第二十一』（西尾市立図書館岩瀬文庫蔵）
[38]「北沙奇聞録」（東京海洋大学所蔵）
[39]「享和漂民記」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[40]「志州小平次外国江舟吹流ル由来記　天明五巳歳　写」上藤正総写
[41]「十三夜丸臺湾漂流記：完」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[42]「神昌丸漂民記」
[43]「豆州下田港江異國船入津漂流人乗セ来始末荒増於異船承リ書留写漂民蠻話：完／翠羅堂禾恵誌」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[44]「船長日記／池田寛親撰」文政六（一八二三）年

[45] 「大日本土佐國漁師漂流記／鈍通子記録」嘉永六（一八五三）年
[46] 「大日本土佐國漁師漂流譚」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[47] 「多良間漂流記」安政七（一八六〇）年
[48] 「筑前船漂流記」（東京海洋大学所蔵）
[49] 「中華漂流記」（東京海洋大学所蔵）
[50] 「通航一覧　琉球国部　巻之二十四」嘉永三～六（一八五〇～一八五三）年（東京大学史料編纂所所蔵）
[51] 「督乗丸魯国漂流記」漂流奇談全集／石井研堂編校訂、一九〇八年
[52] 「土州漂流人口書：完」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[53] 「難船紀聞／大田南畝撰」
[54] 「南瓢記　五巻／枝芳軒著」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[55] 「日本人唐国へ漂流長崎江送届帰国之記」但　牡鹿郡小竹浜六兵衛船
[56] 「羽州新屋敷村吉太郎漂流之聞書」（東京海洋大学所蔵）
[57] 「漂海記」（東京海洋大学所蔵）
[58] 「漂海紀聞／川上親信編」文政八（一八二五）年
[59] 「漂客紀事／兒琮玉卿甫著」（東京海洋大学所蔵）
[60] 「漂流記　二巻／播州彦藏著」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[61] 「漂流記　上　永壽丸、督乗丸、神昌丸」（東京海洋大学所蔵）
[62] 「神昌丸漂流記　下　神昌丸、幸太夫、磯吉」（東京海洋大学所蔵）
[63] 「船便唐物語」（東京海洋大学所蔵）
[64] 「撫養天野屋船南部船外船二被助聞書」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[65] 「文政九戌年越前之者九人唐國南京省中漂流覚書」（石井研堂漂流記コレクション）（東京海洋大学所蔵）
[66] 「李朝実録（世祖八年二月）」（『最新版　沖縄コンパクト事典』二〇〇三年二月、琉球新報社発行）
[67] 「魯西亜國漂流記／鈴木重宣写」
[68] 「魯西亞國船渡來記　乾、坤」（東京海洋大学所蔵）
[69] 「露西亜漂流記」一八一七年
[70] 「呂宋覚書〔立原翠軒〕」
[71] 「呂宋國漂流記／大槻清崇記」森下晋二氏寄贈本、積成會寄贈本（東京海洋大学所蔵）

d. 漂流先	能動的移動距離 (a-b)	能動的移動距離 (b-c) または (a-c)	b-c 日数	受動的移動距離 (c-d)	c-d 日数	引用文献
沈没	170km	450km	-	-	-	4
沈没	-	80km、190km など	-	-	-	1
沈没	-	80km、190km など	-	-	-	1
沈没	-	80km、190km など	-	-	-	1
沈没	-	80km、190km など	-	-	-	1
沈没	-	80km、190km など	-	-	-	1
沈没	-	ca. 60km	-	-	-	6, 7
沖縄県宮古列島多良間島南海岸	700km	700km	ca.30日	1900km	76日	47
清国乍浦（ZhaPu）近辺の小島（中華人民共和国上海市虹口区乍浦）	-	1200km	-	1900km	1ヵ月	22, 31, 63
(アメリカ船オークランド号)	-	-	-	-	-	60
(アメリカ捕鯨船ヘンリー・ニーランド号)	-	400km	-	-	-	11, 33, 34, 38, 43
八丈鳥島	-	35km	-	＞625km	20-23日	26, 64
八丈鳥島	100km	70-100km	2日	＞650km	8日	19, 30, 45, 46, 52
フィリピン、サマル島またはミンダナオ島の南部ダヴァオ付近の、ホローグワン島	39km	370km	-	＞3300km	10ヵ月	71
カリフォルニア	-	750km	-	＞8250km	3ヵ月	28
フィリピン、ルソン島北部カガヤン州	-	-	-	＞2500km	-	21
フィリピン、ルソン島北部バボヤン島（Babuyan 諸島）	-	640km	-	＞2500km	-	20
揚子江河口松江府（中華人民共和国上海市松江区）	-	500km	-	900km	-	65
カリフォルニア、サンタ・バーバラ沖	380km	250km	-	9000km	-	25, 29, 44, 51, 61, 67
千島列島春牟古丹島（ハリムコタン島／ハルムコタン島／Kharimukotan 島）	-	640km	-	2400km	9ヵ月	23, 58, 61, 69
八丈島（東京都八丈島）	-	-	-	270km	八丈-江戸4日	8
八丈島末吉村（東京都八丈島八丈町末吉）	22km	60km	-	300km	-	8
アメリカ船	-	＞710km	-	-	-	20
千島列島幌筵島（パラムシル島／ホロムシロ島 Paramushir 島）	-	720km	-	2000km	7ヵ月	39
フィリピン、バタン（Batan）諸島の小島	-	80-90km	-	＞3000km	24-27日	56
安南（ベトナム）西山（ティエンジャン省・タイソン島）	40km	400km	約12日	＞4400km	約50日	12, 54
アリューシャン列島の島	26km	-	-	＞3000km	5ヵ月	20, 35, 68
八丈鳥島	-	-	-	＞880km	-	8
八丈鳥島	-	60km	-	650km	14日	8
アリューシャン列島のアムチトカ島（Amchitka 島）	2.8km	190km	-	＞3700km	7ヵ月	42, 61, 62
千葉県安房国朝夷郡千倉（千葉県南房総市千倉町北朝夷）	-	-	-	＞2000km	-	53, 59
清国福建省（中華人民共和国福建省）	-	500km	-	＞2000km	1ヵ月	49
清国（中華人民共和国）	-	-	-	＞2500km	-	55

表１　日本の海難記録

年	和暦	船種	船名 (船主・乗船者など)	a．船籍（出身地）	b．出港	c．仕事海域 (海難海域)
2008	平成20	巻き網漁船	第58寿和丸	いわき市小名浜機船底曳網漁業協同組合	宮城県塩釜港	千葉県銚子市犬吠埼灯台沖東350km
1914	大正3	サンゴ船及び漁船	複数漁船（約60人）	五島富江、大分、鹿児島県坊津町など	富江、鹿児島県坊津	長崎県五島市男女群島
1910	明治43	サンゴ船及び漁船	複数漁船（約200人）	五島富江、大分、鹿児島県坊津町など	富江、鹿児島県坊津	長崎県五島市男女群島
1906	明治39	サンゴ船及び漁船	複数漁船 (173隻734人)	五島富江、大分、鹿児島県坊津町など	富江、鹿児島県坊津	長崎県五島市男女群島
1905	明治38	サンゴ船及び漁船	複数漁船 (155隻219人)	五島富江、大分、鹿児島県坊津町など	富江、鹿児島県坊津	長崎県五島市男女群島
1895	明治28	サンゴ船及び漁船	複数漁船（約300人）	五島富江、大分、鹿児島県坊津町など	富江、鹿児島県坊津	長崎県五島市男女群島
1895	明治28	カツオ漁船	複数漁船（713人）	鹿児島県枕崎		鹿児島県大島郡黒島近海
1859	安政６	廻船	善宝丸	岩手県宮古市	江戸	神奈川県浦賀沖
1850	嘉永３	廻船	浮亀丸	長州（山口県）		千葉県犬吠埼沖
1850	嘉永３		栄力丸			三重県志摩大王崎
1850	嘉永３		天寿丸 (和泉屋庄右衛門)	紀伊国日高郡（和歌山県日高郡日高町）		静岡県伊豆沖
1844	弘化１		幸寶丸	阿波国（徳島県）		紀伊国比井岬沖（和歌山県日高郡日高町大字比井沖）
1841	天保12	はえ縄漁船	永福丸 (ジョン万次郎)	高知県土佐清水市中浜浦	土佐宇佐浦（高知県土佐市宇佐町宇佐）	高知県土佐沖
1841	天保12	廻船	十七反帆観音丸 (観吉丸)	奥州伊達郡北半田（福島県伊達郡桑折町北半田）	宮城県亘理郡荒浜→宮城郡石浜港（宮城県塩竈市浦戸石浜）	千葉県九十九里浜沖
1841	天保12	廻船？	栄寿丸 (中村屋伊兵衛)	摂津国（大阪）		千葉県犬吠崎沖
1828	文政11		仁寿丸	八丈島八重根（東京都八丈島八丈町大賀郷八重根漁港）		
1827	文政10		融勢丸	奥州八戸（青森県八戸市）		房州沖（千葉県房総沖）
1826	文政９		寶力丸	越前国丹生郡下海浦（福井県丹生郡越前町）		長門国仙崎沖（山口県長門市仙崎）
1813	文化10	廻船	督乗丸	尾張名古屋	江戸（東京湾）	遠州灘
1812	文化９	薩摩藩御用船	永寿丸	鹿児島県薩摩川内市港町船間島		紀州灘（和歌山県沿岸）
1809	文化６	漁船		静岡県浜名郡新居町		
1808	文化５	漁船	(与兵衛)	静岡県浜名郡新居町、源太山町	掛塚港（静岡県磐田郡竜洋町掛塚）	渥美半島沖（遠州灘）
1806	文化3		稲若丸	安芸国豊田郡木谷浦（広島県東広島市安芸津町木谷）		静岡県伊豆下田沖
1803	享和3		慶祥丸	奥州北郡牛滝村（青森県下北郡佐井村）		千葉県銚子沖
1795	寛政7		徳永丸 (久保屋儀兵衛)	陸奥国土佐郡青森大町（青森県）		北海道函館沖
1794	寛政６	南部御穀船	大乗丸	奥州名取郡閖上浜（宮城県名取市閖上閖上浜）	宮城県石巻市→寒風沢（宮城県塩竈市浦戸寒風沢沢）→江戸	安房沖、房州新湊沖（千葉県房総半島沖）
1793	寛政５	廻船	若宮丸（津太夫）	陸奥国石巻（宮城県石巻）	宮城県仙台	仙台沖（仙台-江戸）
1790	寛政２		住吉丸	日向志布志浦（鹿児島県志布志市）		
1785	天明５	廻船	(長平)	高知県香美郡香我美町（香南市香我美町）		高知県室戸沖
1783	天明2*1	廻船	神昌丸 (大黒屋光太夫)	伊勢・南若松村（三重県鈴鹿市南若松町）	伊勢　白子村（三重県鈴鹿市白子町）	駿河沖（静岡県駿河）
1780	安永９	貿易	元順号	清国（中華人民共和国）		
1779	安永８		住吉丸	大坂安倍川		伊豆、中木浦（静岡県賀茂郡南伊豆町中木）
1775	安永４			相馬領（福島県相馬市）		

d. 漂流先	能動的移動距離 (a-b)	能動的移動距離 (b-c) または (a-c)	b-c 日数	受動的移動距離 (c-d)	c-d 日数	引用文献
清国福建省泉州恵安県の小島（中華人民共和国福建省泉州市恵安県）	480km	330km	-	＞2600km	3ヵ月	55
ミンダナオ島	-	1300km	-	＞3300km	-	48
清国南通州沖（中華人民共和国江苏省南通市沖）	-	270km	-	1950km	-	17
	-	400km	-	-	-	40
台湾	-	6km	-	1800km	-	17
朝鮮国江原道江陵（大韓民国（韓国）江原道江陵市）	-	86km	-	1120km	-	18
八丈島島	-	-	-	690km	-	8
台湾海峡の小島	-	96km	-	2400km	2-3ヵ月	41
清国浙江省舟山列島花山（中華人民共和国浙江省舟山市定海区大菜花山）	-	ca.90km	-	2300km	3ヵ月	32
清国福建省（中華人民共和国福建省）	-	180km	-	2500km	4ヵ月	57
清国漁山（中華人民共和国浙江省寧波市象山の最東南端の漁山列島）	-	ca. 600km	-	640km	-	16
八丈島島	-	75km	-	500km	-	14
ロシア・カムチャッカ半島南端	-	700km	-	＞2800km	6ヵ月	
八丈島島	＞660km	ca. 330km	-	550km	2ヵ月	8, 9
駿河国安部郡清水浦（静岡県静岡市清水港）	-	-	-	＞1400km	-	45
フィリピン、ルソン島（呂宋）	-	-	-	＞1700km	-	70
小笠原母島	ca. 83km	300km	-	ca. 1000km	72日	10, 24, 36, 37
フィリピンバタン島（Batan）	-	ca. 70km	-	＞2150km	1ヵ月	27
択捉島付近の島	-	100km	-	1500km	-	15
無人島→ポシエット湾（ロシア Posyet Bay）	-	280km	-	800km	-	13
南方の島	-	200-300km	-	-	-	14
北面仇彌島（沖縄久米島）	-	-	-	＞766km	-	66

表１　日本の海難記録（続き）

年	和暦	船種	船名 (船主・乗船者など)	a．船籍（出身地）	b．出港	c．仕事海域 (海難海域)
1774	安永３		永福丸	陸奥国小竹浜（宮城県石巻市小竹浜）	浦賀（神奈川県横須賀市浦賀）	平潟沖（神奈川県横浜市金沢区平潟町）→塩屋崎（福島県いわき市平薄磯字宿崎塩屋崎沖）
1764	明和１		伊勢丸	筑前志摩郡唐泊浦（福岡県福岡市西区宮浦-唐泊港）		茨城県鹿島灘
1761	宝暦11		福吉丸	陸奥国亘理郡荒浜（宮城県亘理郡亘理町荒浜港）		千葉県銚子沖
1757	宝暦７	廻船		志州（三重県）		大阪-伊勢
1757	宝暦７	廻船？	若市丸	志摩国布施田浦（三重県志摩市志摩町布施田）		志摩、大王崎（三重県志摩市大王町大王崎）
1756	宝暦６			陸奥国津軽郡石崎村（青森県東津軽郡平舘村石崎）		松前沖（北海道松前郡松前町）
1753	宝暦３	廻船	(鍋屋五郎兵衛)	大阪府阪南市箱作		
1752	宝暦２	廻船？	十三夜丸	奥州相馬（福島県相馬市）	奥州相馬（福島県相馬港）	磐城沖（福島県いわき市沖）
1752	宝暦２	20反帆廻船	春日丸 (大島屋加平衛)	宮城県気仙沼		宮城県仙台沖
1750	寛延３		神力丸	陸奥国盛岡郡白浜村（岩手県宮古市白浜）		宮城県仙台沖
1741	寛保１			薩摩（鹿児島県）		沖縄久米島沖
1738	元文３			江戸堀江町（東京都江戸川区堀江町）		千葉県須崎沖（千葉県館山市洲崎沖）
1728	享保13	廻船	若潮丸	薩摩（鹿児島県）	鹿児島または大阪	鹿児島-大阪間
1719	享保４	廻船	鹿丸（甚八）	静岡県浜名郡新居町	宮城県石巻	千葉県九十九里浜沖
1705	宝永２			琉球（沖縄県）		
1671	寛文11	航海				長崎（長崎県）
1670	寛文9*2	11反帆廻船		阿州海部郡浅川浦（徳島県海部郡海南町浅川浦）	紀州有田郡宮崎（和歌山県有田市宮崎）	遠州灘（静岡県浜松沖）
1668	寛文８		(権田孫左衛門)	尾張国知多郡大野村（愛知県知多市大野町）		三河国の沖（愛知県東部）
1661	寛文１			伊勢松坂（三重県松坂市）		遠州灘（静岡県浜松沖）
1644	寛永20			越前国三国浦新保村（福井県三国町新保）		新潟県佐渡沖
1625	寛永２			讃岐国高松（香川県高松）		和歌山県紀伊沖
1456	景泰７			韓国済州島		韓国済州島

*1　天明２年の事例も同様に太陽暦では1783年。
*2　寛文９年の事例は旧暦で12月の為太陽暦では1670年となる。